

第二章 マイホームでのモノ語り

「マイホームに「MY・・・」がない

団塊パパとママの憂鬱

わが家はあるけれど、いまわが家に「マイホーム」はない、と藤谷さんはいいます。なぜ？

藤谷祐さんは若いときから「マイホーム」しあわせ家族」をめざしたひとり。団地の2DKから郊外の3LDKに移って、ふたりの子どもを育てあげて、その成功者と見えたのに、いまわが家に「マイホーム」はない、といいます。

ここでは藤谷さんのいい分を聞かないわけにいきません。

マイホーム・・・

なんともいえず響きのいいことばです。これほどまでにやわらかくて生活感を内包しえたカタカナ語を他に探すのはむずかしいほど。耳にすると心が安まります。

マイホーム・・・

繰り返しても変わりません。

それはいま高齢者となつていくみなさんが、それぞれの人生をかけて、二〇世紀後半の五〇年をかけて、その内容をつくつた日本語と比べていいのです。

ですから細部の意味合いは個人によって異なります。

よき（良き、好き、善き）もの、ひよわなもの、やわらかなもの、たおやかなもの・・・を守る城として、「マイホーム」は「わが家」や「家庭」などに負けない温もりをカタカナ日本語として持つに至っています。そこはかたない温もり。

ですからそのぶん「ホームレス」ということばがそこはかたない侘びしさを伝えます。

思い起こせば戦後っ子だったパパとママは、企業戦士といわれた先輩に「マイホーム主義」とからかわれながらも、狭い団地の2DKに身を寄せ合って暮らして、ふたりの子どもを育ててきたのでした。夫婦と子どもふたりの家族が都市型住民の典型となり、「核家族」と呼ばれ、「標準家庭」ともなりました。

マイホーム・パパとママは、その後、2DKの団地の二段ベッドで育ったふたりの子どもたちそれぞれに一部屋をと考えて、というより子どもたちにもせがまれて、職場までは遠くなくても、団地からさらに郊外のプレハブ一戸建ての3LDKに引っ越ししました。そうできた人は「マイホームⅡ幸せ家族」の成功者だったはず。

そういう体験をもつご家庭は少なくないでしょう。人生模様はあれこれあっても、それが「しあわせ家族」だったのですから。そういう経緯を保っておられる多くのご家庭はここでは静かに見守ることにして、築ん十年の家はある、でもわが家に「マイホーム」はない、という藤谷さんのお宅を訪ねて話を聞いてみようと思います。

藤谷さんは郊外の3LDで夫婦と子どもふたりの「標準家族」で穏やかに暮らして「マイホーム」づくりの成功者と見えたのに、藤谷家の「マイホーム」の細部に何やら亀裂が生じているようなのです。

人生のはるか遠い地点までを見透かして、可能なかぎりの費用を工面して、マイホームを得て、いまそのころ見据えていた地点の近くに高齢者として立っている。長かった来し方を顧みている、築ん十年のマイホームの当主として、存在感の薄かったことを感じている、と藤谷さんはいいます。家も年を経て傷んでいますが、大手の建設元にも当時の資材がなく、というより費用がことのほか多額で直せないといっています。

みずからの希望を抑えても家族の希望をかなえることを優先してきた年月。

ですから不相应な応接セットや家具といった家族との共用品はあっても、自分のために求めた専用品というのは少なく、**「モノと場」**に表わされる当主としての存在感が希薄なのに気づいたというのです。

***アノヒトとかヒカラビてる人とかいわれて**

子どもたちが自立をせず、家が「エンブティ・ネスト」（空の巣）とはならず夫婦と子どもふたりの核家族の形を保っている藤谷家。外から見るかぎりでは、標準的な「しあわせ家族」そのものなのです。

娘と息子がふたりとも三〇歳をすぎても「パラサイト・シングル」（寄生独身者）をきめこんで、親元から出て行かない家庭。その意味ではサッカーならイエローカード一枚ずつといった子どもと暮らしている藤谷さんが、いま「しあわせ家族」ではないという理由がにわかにはわかりません。

藤谷さんは団塊世代でも最多の昭和二四年（一九四九年）の生まれ。奥さまは一つ下の「ぶらさがり団塊」である昭和二五年生まれ。結婚が遅かったために子どもたちからは、年とった両親はいやだと無理難題をいわれたりするようです。

イエローカード一枚の娘のほうは、「子団塊」のあおりを受けて就職難、短大を出てからずっとフリーター暮らし。かせぎはほとんど衣装と旅行に消えている気配。気ままに過ごしてきたのに、結婚資金の準備がなかったからオヨメにいかなかったのだといいます。いい相手がいればなんと少しでも費用は工面したはずだといっても、いまさらといって聞き入れません。それは年くった親の考えることで、友人たちの若い両親は自分と将来子どものためにしっかりと貯蓄をしているのにと、ことあるごとに繰り返します。

これがわが家に「マイホーム」がないという藤谷さんの訴えのひとつです。

現役のころの藤谷家にいつも貯蓄がなかったのはたしかです。「ほどほどの赤字人生が男の美学だよ」といつていた先輩に学んで、おカネは貯蓄するよりは周りの人びとへの気づかいと必要に応じて使ってきた。先輩が周りのみんなの暮らしぶりに差の生じないことを何より優先

したからこそ「九割中流の社会」がつくれたのだと藤谷さんは確信していますから、自分もそれにならうことになって、奥方からは幾度となく家計のことを指摘されても従わなかったことを藤谷さんは間違った人生だったとは思っていない。実際にけばけばしい装飾をした式場を借りて友人を呼んで結婚式を挙げるのをバカみたいといっていた娘に、いまになって蓄えがなかったのが結婚をしない理由で、はじめから諦めていたといわれるのはつらいですが、それでもなお自分の選択が間違っていたとは思えないのです。

戦禍のあと、みんなして貧しさを分かち合い、亡くなった人のぶん、傷ついた人のぶんも合わせて三倍も働き、みんなして等しく豊かになろうとして、自分のためには貯蓄など考えもしなかった先輩。その功労者に対して、いま貯蓄がないゆえに「下流老人」と呼び、「老後破産」というタイトルをつける若手ジャーナリストの配慮のなさ。そんな本が売れる風潮に憤りを覚えるといいます。

「下流老人」と呼ばれようと、多くのこういう先人は一日一〇〇円ででも生き抜く覚悟があり、自負があり、ひもじさと貧しさからはじまって貧しさとひもじさにもどった人生を受け入れて、いまさら国からの救済なんか求めはしないはずと藤谷さんは力をこめていいます。

「それにくらべれば、わたしなんぞは腰砕けもいいところですけど」

定年を迎えて、住民税を払って軽くなった退職金の残りを、家の修理よりも娘の遅い結婚のための費用に当てようと思っっているといいます。本人にはそういつてあるとのこと。

下の息子のほうは浪人はしましたが、ごく普通の大学をごく普通に卒業して、就職試験を受けて勤めはじめたふうより名が知れた輸送会社だったのに、短期でやめてしまつて家にいるのだそうです。

親のひいき目でもしつかりしてきたように見えるので、子どもの自主性にまかせているのですが、というより言つても聞かないから気ままにさせているのですが、同じ経緯をもつ友だちとパソコンやケイタイで情報のやりとりをすすいでいるとのこと。親が「ニート化」（N E E T。就業希望を有しない若年無業者）を心配しているのを先回りして、時折り出かけて「職さがし」はしているといいます。

藤谷さんが毎日家に居るようになって、娘や息子の話を聞くともなく聞いていると、両親と同じ高齢者のことを「ヒカラビてる人」とか「ヨボヨボジジババ」といつていることがある。時には父親に対して「アノヒト」、母親には面とむかつて「キミ、元気かね？」とか「オマエは・・・」などと軽くあしらわれていると感じることがあります。父親の存在など意識せず気ままにすごしているし、パソコンを情報源やコミュニケーションの手段にできない親父を軽視していることはありあり見える。

「この家はわたしが名義人なのだというのも愚かしいですしね」といつて藤谷さんは苦笑します。

壁面に娘が貼ったままの「のりか」（藤原紀香）のポスターほどには底値までさがった土地の

築ん十年という家の壁に存在感があるわけではないですし。

「ヒッペガシ娘」vs「ツカエナイ親父」

「高齢者は資産を塩漬けにしているのです」

と、億ションをいくつか持ってカネ儲けに抜け目がないと噂される経済学者が、TV番組で、経済の停滞はそれが理由ですと言い切る。TVをみている藤谷さんの周りにだれもいない。そんなとき藤谷さんは身を乗り出して画面の人物に向かって抗議する。

「資産の塩漬け？ バカいうなよ。塩漬けにできる資産などどこにもないし、わが家では娘に強奪に近い形でヒッペガシ（資産移譲）されているというのに・・・」

高齢者の「平均貯蓄額」が二三七〇万円という解説がはいる。暮らし向きに心配のない人が七割を超えると若いアナウンサーがいう。こんな話題を同居の娘と息子に聞かせたくない藤谷さんは思う。

数字にいつわりはないとしても、将来が不安で貯蓄をしたというのだから、貯蓄の多さより、将来展望をもって貯蓄など考えず生きられるような国づくりをしてこなかったことを話題にすべきではないのか、と藤谷さんは思う。

かつて入社するときから信頼していた会社の先輩は、

「ほどほどの赤字人生が男子の美学だよ」

と、貯蓄など考えずにきっぱりといい、

「きちんと仕事をすれば、どこで何をしていても、ほどほどの赤字暮らしをするものだ」

と言い切って飄々としていたといいます。察するにいま「下流老人」でいるにちがいない。

後輩として藤谷さんは、赤字まではともかくゼロに始まってゼロに終わる人生を納得する覚悟ぐらいはしてきた。このあたりの考え方は、将来が不安で自分と子どもたちのために貯蓄をしたという「純正団塊の世代」の考え方とは違うように感じている。その点では娘や息子には申し訳ないけれども、自分には貯蓄といえるほどの貯蓄はないといいます。

それにしても貯蓄がないからといって高齢者に対して「下流老人」とはなんということをいうのか。戦禍からの復興の時期に、個人の貯蓄など考えずにみんなが等しく豊かになるために分けあい助け合い支え合ってきたからこそ「九割中流」の社会がつくれたのだし、その後もボランティアとして無償の社会貢献をしている人びとに対してあまりに失礼ではないか、と藤谷さんはまた憤慨して黙り込みます。しごとはほどほどにして家にFAXを置かず、確定申告で税金逃がれをし、貯蓄にいそしんでいた同じ団塊Mの顔が浮かぶ。

「あいつが人生の勝者かよ」

藤谷さんはしごととことんやってきたと自負しているし、まだやるつもりでいる。しかし探すとなると高齢者のしごとは少ない。ここにも二〇年間の高齢社会対策の延滞が露呈していると藤谷さんはいいます。

女性のしごとは「ダイバーシテイ」（多様性）と呼ばれて多様に用意されていて、女性がこれからの国の経済、社会の担い手になるとはやしたてるのはいいのですが、どれほどの女性の実力で仕事をし、自分のかせぎで暮らしているのだろうか、ローライズ・パンツ（体型ギリギリのヘソ出し衣装）からいそいそいつものディオールのパーティー・ドレスに着替えて、「変衣変性」する娘の姿をみながら、藤谷さんは際限なしの「女性化」に懸念をもっています。親の育て方がどうのこうののではなく、これが風潮なのだからとやかくいっても仕方がないとはわかっているのですが、とって藤谷さんはまた黙り込む。

*総理も女性と若者に肩入れ

「マイホーム」に亀裂のはいつたお宅の事件をよく聞くことからして、藤谷さんのお宅が特別とはいえないのかもしれませんが。若い娘たちを「時代の花」としてひたすら擁護し、女性の活躍に期待する風は巷のすみずみにまで吹いているのはたしかです。

両親や祖父母の「六つの財布」からうまくせしめるのも実力のうちとする意見もあり、何より娘たちは必要に応じての家庭内ヒツペガシを当然の権利と考えています。教育費一五〇〇万円までを無税譲渡する政策を見逃さない。それなら目前でいま必要としている娘たちの社会教育費としてまわすべきだという論法です。こんな風潮に耐えられる家庭はどれほどあるのでしょうか。

女性への追い風は経済界からも吹いています。「男女格差報告」についてのダボス会議の報告で、日本はこれまで長く一〇〇位以下という女性活用の低さが指摘されてきました。それが急に経団連や同友会まで女性の登用を言いだし、「ダイバーシティ（多様性）の推進」としてすすめています。

安倍総理もことあれば女性と若者の成長力に期待し、女性重視を打ち出しています。

女に生まれてよかった、笑顔で「お・も・て・な・し」といえば、なんでも可という世相なのです。テレビの画面は、すでにどのチャンネルのどの番組も、はしやぎまわる女性たちで占められています。若づくりの男たちがわき役で出ますが、高齢者は違和感があつて画面に占められません。知名人がこんなことを書いたり言ったりしたら白眼視されるでしょう。

藤谷さんは職場の雰囲気をごんなふうに想像します。

「団塊の世代」の男たちがいなくなつてしまった職場は、残つた男たちでは頼りなくてもたないのでしょうか。そこで女性社員が実力以上にはしゃいでいてくれたほうが華やかでいい。経営側の見積もりにはそんなところもあるのでしよう。

職場では意に沿わないと「ツカエナイ上司！」になります。

家では人並みに応じられないと「ツカエナイ親！」としてあしらわれます。

お前こそ「ヒツペガシ娘！」といい返せないところがつらい。藤谷さんばかりか、うかうかしていると心優しい高齢者がみんな居場所もない、おカネもないになりかねないので。

新世紀になって、若い女性やIT青年たちとともに、年輪を経て熟成した生活感性で渋く輝いているはずの高齢者が、居場所もないおカネもないになるとは何たる仕打ち！

職場では若い社員に無視され、IT音痴と揶揄され、はてはリストラの対象ともなった。「ハローワーク」（公共職業安定所）の窓口の混雑ぶりや、上野公園や新宿などで見られた「ホームレス」用の青テントの群れや炊き出しに集まっていた人びとを思うたびに、藤谷さんには、戦後すぐごろの「上がり」に近かったところから「ふりだし」へと戻って行くように思えてきます。「基本法」のめざす「だれもが安心のできる老後」どころではないのです。

いったいだれが振った賽の目が悪かったのでしょうか。

「家庭内ホームレス」の予感

何としたことでしょうか。

わが家において「ホームレス」とさほど遠くない侘びしさを感じている戦後ツ子パパが増えているといえます。高齢者を資産で見分ける「下流老人」や「老後破産」ということばが先回りして動いています。

パパが過ごすのにふさわしいステージが家庭内からなくなりつつある。というよりこれまでもなかったのに気づかなかっただけのこと。

テレビのチャンネル権はもととありませんし、というより見るに値する番組がないのです。

ラジオは深夜にふとスイッチをいれて、ほっとするいい人の話や音楽とめぐりあうことがあります。連夜の夜ふかしは体にいけませんし。

クルマは一台しかありませんから行く先が違えば使えない。というより子どもたちのようにあちこち行く場所がないです。しかし車検・整備・ガソリン・JAF費用まですべて親持ちです。

食事は洋風が多くなりました。うどんよりスパゲッティ、おでんより肉料理。自分では急に作りようがないですから外食時代に好きだったものも食べられない。これがつらい。

つまり「対策大綱」が掲げる「居場所」も「出番」も増えているといいますが、いっこうに見えてきません。むしろ減る状態が深まっていくように思えます。

聞けばだれもが同様で、会社でのしごとがなくなつて、家にも居場所がなくなつて、「ホームレス」気分になる。といって屋外で長時間をすごせる居場所は限られていて、二四時間営業のファミレスか、公共図書館か、パチンコ屋の休憩室くらい。だからウォーキングでいらいらを解消するしかありません。

「ステージ」がない原因は社会のしくみにあるとはわかつて、どうしたらいいのかが解らない。わが家のなかにさえ「居場所」がなくなる心配。

このまま推移しては、高齢者のだれもが不安なく暮らせる「高齢社会」へ、少なくともそこへ向かっていると感じられる暮らしは招き寄せようもないのです。

*どうする？孤立無援の家庭内パパ

藤谷さんは改めてじっくりわが家の中を見直して見ます。

本だなの本が動いていない。家具はどれも一〇年以上まえに購入したものばかり。二〇世紀の中古品ばかりです。一方、日々の暮らしの表面を流れていく日用品は百均（DAISO）やスーパーものが多くなりました。

シャツはユニクロ（UNIQLO）かアジア途上国製品です。妻や娘の持ち物にはブランド品もあって、ルイ・ヴィトン（LOUIS VUITTON）やプラダ（PRADA）やディオール（Dior）やシヤネル（CHANEL）などは藤谷さんにもわかるものもあります。しかしスーパー品とのアンバランスに父親であり夫である自分への無言の不満が隠されているように思えます。

藤谷さんのブランド品といえるものは、後にも先にもオメガ（OMEGA 終わりの意）の腕時計だけ。家族を優先してきたことでの専用品の希薄さは、みずからのために生きることへの自負の欠落ではないかとさえ思うのです。

気づいてみたら「マイホーム」の形は保ちながら、家庭内で孤立し、ふり出し感覚で暮らしている藤谷さんのような人びと。残り長い人生を前にして、傍らに介護高齢者や障害者、認知症の人、いろいろな病気にとりつかれている人びとを気にしながら、何もできないでいる藤谷さんのような高齢者が多くいるのに違いありません。

□ わたしのモノの存在感

マドギワに「MY・チエア」を据える

藤谷祐さんはリスクを負わない着実なタイプなだけに現状への大胆な解決にはふみきれないようです。

そこでもうひとり、夫婦に子ども二人の標準家族を保っている中村暁夫さんの暮らしを見てもみましょう。

中村さんは可能だとみれば挑んでみるタイプの積極派。企業側の事情で藤谷さんと同じころにリストラに合ったときに、給料は度外視して同業他社に移りました。と同時に「家庭内リストラ」にも着手したのです。子どもふたりのうち、上の息子は会社の出張で東南アジアに出ています。下の娘の方は当然のようにして家庭内に居座ってのびのび暮らしています。奥方の話によると、父親が不在の折りに恋人を連れてきて、いずれはここで妻の座をといた勢いで居心地のよさをアピールしたりしていたそうです。父親似でといって、母親としては扱いに困っているようです。

そんな中村家のようすを覗いてみましょう。

中村さんは五五歳のとき人生の転機を感じて動いたことはいいました。

動いたといってもここは家の中でのことです。リビング・ルームの一面、ネコの額ほどの庭

と室内の双方が見渡せるマドギワに、特別席「シニア・スペシャル・シート」を据えることにしたのです。会社でもマドギワでしたし家でもマドギワと、居心地を合わせることにして。

まずは旅先で記念に入手したパピルスに画いた「狩猟図」を壁面に飾ることにしました。そして文字盤が気に入っているスイス製の置き時計をサイドボードの隅に。

中村さんの「SS（シニア・スペシャル）シート」は、高齢期の人生をゆだねる「コア（核）用品」として、含みのあるいい選択のようです。含みというのは本人の「不在の在」としての存在感のこと。重量感より意匠センスより何より座り心地を優先します。いくなればわが家の「玉座」か「師子座」か「座禅座」かとしての存在感です。

かつてインドでシャカムニが宝樹の下に座して思惟したように、わが人生の来し方と行く末を半跏思惟する座なのですから、「SSシート」として大切に扱うことに。すでに愛用のイスをお持ちのみなさんは「MY・チェア」と呼んでみてください。座して高齢期人生の今日から明日を静かに思惟する「半跏思惟丈人」となる。わが国には坐して過ぐす習慣がなかったので、親ゆずりの「MY・チェア」をお持ちの方は少ないでしょう。そこで、高齢期人生への投資をすることになります。

*即座の効用は「坐忘」の境地

「人間は誰しも『私の椅子』と呼べるような椅子を持つ必要がある、そうやって初めて自宅で

本当に落ち着いた気分を味わえるのではないか」

というのは、中村さんがマイホームを建てたころの有名建築家の提言で、まことにその通りとは思ったものの、家族優先の当主としてはそこまでの自己主張をしませんでした。途中で何度も座り心地のよさそうな椅子を見るたびに思い出したことばです。若い先長い高齢期を通じて使い込むことよって座り心地を熟成させてゆくというのが「MY・チェア」。

中村さんのデパートめぐりの調べによれば、さすがに「座る文化」の歴史が長い欧米の製品はさまざまに意匠をこらして、見るからによく、座り心地もよさそうだといいます。

最高の座り心地を誇るのは頭と腰がほどよくフィットする北欧製リクライニング・チェア。競うのはドイツ製スツール、イタリア製アームソファ、カナダ製スウィング・チェアなど。いずれ劣らぬ居ずまいがあるし、値段も思いのほか幅があるようです。

そこで中村さんは調べの段階で思い悩んだ末に座ってみてドイツ製スツールにしました。長い高齢期を安らいですぐす拠点が「MY・チェア」なのですから、これといったイスと出会ったら思い切つて投資（浪費）をすること。奥方からすれば腰を抜かすほどの値段。その上に初恋の人を失ったと同じ思いを二度もすることはない、と目の前ですから、奥方としては素直に喜ぶわけにもいきませんが。

一日の活動を終えて、「やれやれ」と腰を落とし、心を静めてひとしきり一日をふりかえり、「さて」と気を引き締めて明日を思い、「よし」と意を決して立ち上がる。

それでいい。それが「MY・チェア」の即座の効用なのですから。

どっかり座って、からだの重みとともに過ぎ来し方への充足感と行く末への待望感を委ねる。時には座して陶然として、すべてを忘れる「坐忘」の境地にもひたれる。

それなくして何の人生か。

このあたりの選択と実行は挑戦派の中村さんならではのと思わせませす。

わたしのモノ同士のモノ語り

高齢者意識をもって高齢期に使うモノのありようを考えることは、「家庭内高齢化（リストラ）」のはじまりであり、企業人がそこに気づけばわが社の高齢化製品を考えるきっかけになるはずです。そこで中小企業が保持する技術が動く。それが高齢化経済への突破口になり、日本経済の立ち直りに寄与することになります。しかしユーザーの側からの強いたしかな要請がないかぎり、いま企業はリスクを負ってまでは動かない、というか動けない。

中村さんのような高齢者がさまざまな製品を求めて要請を出すことで、海外進出ができずに国内で「足踏み」していた中小企業が動く。動かなければマーケットを外国製品に奪われることになるからです。百均商品でがまんしてきた日用品を、わが国の高齢者の生活感性に見合った優良な国産（地産）品に差し替えるチャンスになります。モノが良くて安心して使えて長持ちするなら、やや高でも高齢ユーザーは家庭内の「高齢化コア用品」として入手するでしょう。

候補はいろいろ。中村さんは、デジタル化したので実用性を失った高級一眼レフを、シャッター音と手触りの感触に思いが残るからといって手元に置いています。それに部品やレコード版を揃えるのには一苦労しますといってオーディオ機器を身近に置いています。

楽器。碁・将棋盤や釣り具セット。中村さんはゴルフはやらない。手仕事に感じ入っている碗・皿・硯。明かり、時計、置物などのアンティーク（西洋古美術品）。日ごろ忘れがちな彫刻や絵画。造形や色彩が精細な貝や蝶。さらには地球儀、船・飛行機・汽車・車のミニチュア。素朴な木製アフロ・グッズ・けっこうあるものです。

それにあちらこちらに散在していたのを全員集合！をかけてあつめた七〇冊ほどの愛読書。手元に置いておきたい本はそれで十分だといいます。

どれもお気に入り入りの「わたしのモノ」であり「高齢化コア用品」の候補ですが、その中から五〇七点を選び出して、室内に並べて時に並べ替えをする。暮らしの基点になる「MY・チェア」から動いて出会える範囲に配置すればいいとのこと。

家庭内に「高齢期のステージ」が立ち上がることになります。

*「高齢化コア用品」を結ぶ暮らしネット

地球儀なんか意想外におもしろいのではないのでしょうか。

極東アジアにある島国ではなく、太平洋リング（大洋弧）の一角にあ



って、経済や文化の上で大きな貢献をして輝いている「海洋大国ニッポン」。領土では六一位ですが領土に領海・排他的経済水域を加えると世界九位。海洋大国であることを宇宙飛行士の視点で納得することができます。極東の「小日本（シャオ・リーベン）」であるとともに、パン・パシフィック（PP）の海洋大国であるという多重性を理解することができて、将来への快い自信を与えてくれます。本当の夢の旅は船旅にある。タンカーも必要ですが、仔細な日本的サービスを徹底した豪華客船を太平洋航路に何艘か就航させる。船中で外国の人びとと出会いながら、日本と日本製品の優良なところをおおいに話題にすれば楽しい。造船大国の再興は世紀をかける事業となります。

家庭内の話に戻りましょう。

いまや手にいれるのは困難な貴重種だといいますが、蝶の皇帝「テングアゲハ」なら華麗に舞う姿を思うだけでいい。胡蝶に「物化」して舞ったという壮年の莊子の「周（莊子の名）の夢に胡蝶たるか、胡蝶の夢に周たるか」という「胡蝶の夢」は「坐忘」とともに味わって損はありません。

旨し「天の美祿」（酒）をとくとくと注ぐ「しりふくら」（徳利のこと。掌の上でのぬくもりは触れてなまめかしい）でもいい。もちろん親ゆずりの骨董品でもあれば、さりげなく実用にして活かします。高齢期の願望を仮想空間に委ねる「わたしのモノ」の候補はいくらでもあります。なければレプリカを置いてホンモノを探し出すことになります。

レプリカとその現物化が重要なのは、みんながそれを期待し、企業の生産現場に声がとどけば、「高齢社会」のモノを豊かにする内需の契機となるからです。需要者と制作者をつなぐためのツールは、ネット時代のお手のもの。本稿にも欄外にさまざまなアイデアがあります。

ここしばらく粗悪品に耐えてきた円熟期の高齢者が、生活感性を開放できるような製品を遠慮なく要請するのに対して、保持する技術力で応えて「わたしのモノ」として終生愛用できるような「高齢化コア用品」を創り出してくれる各地の熟練技術者のみなさんに、ここでエールを送ってから先にいくとしましょう。

みなさんが選んだいくつかの「高齢化コア用品」とそれをめぐるいくつもの季節小物、それに奥方所有の「わたしのモノ」の応援をえて配することで、存在感が希薄であった時に比べれば、パパとママの存在感を伝えるしかけが家の中に見えてきます。

はじめは気づかなかった同居人は、「パパのチェア」や「ママの手編みクロス」や壁飾りや日用品に示される「家庭内高齢化」の意図に少しずつ関心を強めることとなります。同じ機能のモノでも親と子に較差（格差ではない）があつていい。「わたしのモノ」による「家庭内の一品多様化」はモノを通じた親子語りのはじまりを意味します。

外へ出て優れたボランティア活動をしていても、わが家の中に高齢者としての存在感がないようでは、ほんとうに優れた高齢社会活動家とはいえないでしょう。

一日のテーマを「八方時刻」に振り分ける

だれもが何の疑いもなくさしたる不具合もなく、一日を二四時間として刻んで過ごしています。一時間の体感はかなり正確です。日ごろ、テレビの一時番組組や三〇分ドラマや十五分ニュースや三分コマーシャルに接しているので、これらの長さを体内時計がうまく合算して、日々をつつがなくすごしています。

時計はデジタルが多くなりましたが、長短の針や数字に味わいがあるアナログ時計も、家のあちこちに三つや四つはあるでしょう。十二時、三時、六時、九時の三時間ごとの昼夜八つの刻みは目に焼き付いて鮮明に時刻を示してくれています。

ここではそれを活かして、三時間ずつ八つの刻みを意識した「八方時刻」を、時間表示の多重標準としている坂崎孝さんの暮らし方を推奨したいと思います。

「八方時刻」というのは、次のように一日を三時間ずつの八区にわけたもので、通常用いられている呼び名で示してあります。

更（ふけ） 〇～三時

明け方 三～六時

朝方 六～九時

午前・昼前 九～一二時

午後・昼過ぎ	一二～一五時
夕方	一五～一八時
晩方	一八～二一時
夜	二一～二四時

一日を八区（八方）に分けることで、区ごとの印象が明解になり、それとともに行事や活動もまた明解な記憶を残してくれることになります。

*朝昼晩三時間ごとの生活実感

「更」は五更まであって三更からが日替わりですが、夜更けや深更として日替わりの感覚があるので、それをはじめの一区に据えます。

二区の「明け方」と三区の「朝方」には異論がないでしょう。正午をはさんで四区の「午前・昼前」と五区の「午後・昼過ぎ」そして六区の「夕方」を迎えます。

さて七区（午後六時～九時）の呼称が問題で、気象庁は天気予報で「宵のうち」と呼んでいたのを、人によって捉え方が違うからという理由で、二〇〇七年四月からは「夜のはじめごろ」に変更しましたが、収まりがよくありません。そこで本稿では朝昼晩としての実績をもつ「晩方」を七区に据えました。そのあとが一日の終わりである八区の「夜」となります。

たとえば、坂崎さんの一日はこんなふうになります。

某月某日。

「更」 「明け方」は睡眠。

「朝方」にイヌをつれて散歩をしてから孫といっしょに朝食をして朝刊を読む。

「昼まえ」には米寿を迎えたS先生にお祝いの手紙を書き、Tさんに電話。

「昼すぎ」には軽い昼食をすませて郵便局と図書館へ。

「夕方」にはYさんを訪ねて同窓会の話をし、日用の買い物あと夕刊を読む。

「晩方」には晩飯をすませてTVニュースをみる。

「夜」にはEさんへメールをして読書。夜更かしはしない。

日々を三時間ごとの八区に刻んで、そこで出合う「ヒト」や「モノ」や「場所」をしつかり配置して過ごす「八方人生」には、日々を着実に刻んでいるという充足が感じられます。その間、朝昼晩の三度の食事で「健康」に留意し、読書（朗読がいい）や会話で「認知症」の予防をし、よく歩くことと雑事で「行動力」を保持して過ごします。そうすることで本稿の「体・志・行」三元カテゴリーに配慮しながら日々をバランスよく暮らすという趣旨と重なります。

「八方美人」ほどには目立ちませんが、坂崎さんのような「八方丈人」には生活の実感があります。

「実家依存症」といわれても

このところの傾向として、「三世代同居」は減り続けてきて、高齢者（ここは六〇歳以上）の四〇%までが同居を望んでいるのに、実際に子・孫と同居している人はいまや二〇%台になっています。そんなことはないと思うでしょうが、諸外国と比べて親子の接触が少なくなっているのです。

世代同居が三割ほどは残っていないと、この国に伝来の「わが家三代の暮らしの知恵」が途切れてしまいます。国の骨格をつくっている家庭の絆を強くし、「わが家三代の暮らしの知恵」をしっかり子子孫孫に伝えるには、世代同居はどうしても必要な住環境です。

そこでいま「三世代同居」住宅づくりを進めている渡辺義則さんのご意見を聞いてみようと思います。

渡辺さんも中年期にぎりぎりまで工面して借り入れをして、団地よりやや広い都市郊外の一戸建住宅を購入して転居しました。それでも「二世代住宅」が精いっぱい、このままでは「三世代住宅」にはなりません。

二人の娘がそれぞれに結婚して自立した後は、夫婦ふたりで暮らしています。娘の卒業記念に地元の小学校が分けてくれた梅の若木を庭に植えたときのこと。下の娘のバレーボールの応援（国体）にいったこと。作文や家庭科の手編みを手伝ったこと。恋人の確認に同道したとき

のこと・・・。

父として母としての立場でそれぞれに内容は異なりますが、子育て期のいくつもの困難をクリアしてきた父として母としての感慨のスペースであるとともに、この狭い実家はなお娘にとってはひそかな生活戦略にかかわるスペースでもあるのです。

孫はかぎりなくかわいい。

傷みは目立つものの住み慣れたわが家に暮らしている父と母として、子どもが巣立ったスペースを今度は孫のためにしつらえ直して、祖父母としてわが家の三代目を養育する場を用意することに なります。多くの家庭がいろいろやりくりして「近居」や敷地内「隣居」や「同居」を成立させています。

「近居」の場合は、離れて暮らしている分だけそれぞれの独立とプライバシーは損なわれることはないのですが、離れている分だけ問題回避型の接触とならざるをえません。

幼い孫はかわいいし、暮らしに張り合いをもたらしてくれる。そこで出合いを待ち、会うごとに何かと望みをかなえてやる、やさしいおじいちゃんとおばあちゃんになります。

きちっとした「孫育て」には限界があるのはわかっていますが、現状ではこのあたりが標準的「しあわせ家族」となっています。ここでは「近居」がうまく機能している多くのご家族のしあわせを祈りつつ、減りつづけてきた「三世同居住宅」をめざす渡辺さんの課題を見てみたいと思います。

娘が結婚して世帯を持ち、子どもが生まれる。

近ごろは「できちゃった婚」が並みの時代だから、結婚後一〇カ月のハネムーン・ベビーを待つよりも、結婚六カ月前後が最多とかで、案外すみやかに確実に「ノンプラン・ベビー」がやってきました。渡辺家では息子の長子がそうでした。出張先で妻子を同時に得て、「現地調達」してきたもの。第二子もノンプラン・ベビーだそうです。

渡辺さんの長女は第一子を産んだあと、二五歳までの予定だった第二子の出産期をはずすとあとは先延ばしして三〇歳代に。これが一般的だとすると、少子化に歯止めのかげようがありません。それでも三〇歳の大台に乗って、なんとか二人目の子どもをと覚悟はきめても、不安定な夫婦の収入では将来、養育・教育費が重圧になるのは見えています。

学費は公立でも約一〇〇万円、私立だと約二三〇〇万円かかるといふし、就学前の時期のたいへんさを聞き、マスコミを賑わす子どもたちにかかわる事件を目の当たりにして、不安はつのるばかり。そこで、「カアさん力を借して」ということになります。

*M字型でなく真一文字型の就労

子育てに母親の助力を期待しすぎると、「実家依存症」といわれかねません。

国はこれまで夫婦ふたりによる子育てを「エンゼル・プラン」(文部、厚生、労働、建設の四大臣合意により平成六年一二月に策定)以来の目標として推奨してきたし、若いカップルを対

象にして子どもの養育のしごとをしている専門職の側からは、祖父母の育児参加は歓迎されていないのです。

みなさんは驚いてはいけません。「次世代育成」や「子ども・子育て」の現場では、「祖父母」という文言すら文書のどこにも示されていないのです。これでは孫にわが家三代の暮らしの知恵をと考えても宙に浮いてしまうのではないのでしょうか。

若いふたりによる大都市での子育てと地方での実家での子育てでは支援のしかたが異なっていると思うのですが、さまざまな事情があつて、二人が中心で祖父母は排除されているのです。「実家依存症」といわれても子育てに母親の助力（家族の含み資産）を期待して両親と同居して暮らすことを考える娘夫婦が少なからずいます。

渡辺家では、母が子育てに力を貸し、上の娘がしごとを続けながら第二子の出産を可能にすることにしました。かつて専業主婦を求めた母世代の「核家族」指向から、M字型就業を避けて真一文字型の就業により専業課長でありたい娘による「三世代同居」へのUターンを選択することにしたのです。

「三同同（三世代同等同居）型」住宅をつくる

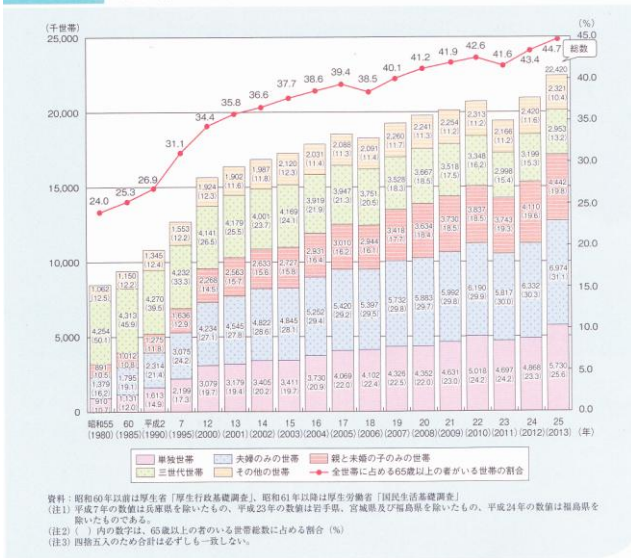
大都市近郊に住む渡辺さん夫妻は、近居して子育て中の娘家族からの要望もあつて、「二世帯三世代同居」型の住居への建て替えを決めています。

覚悟というと大きさに聞こえるでしょうが、目をつむっても、どこに何があるかまでが分かっていない住宅から、新たな暮らしへの転換は、やはり覚悟があるといえます。地方のお宅なら、敷地内での「隣居」が可能でしょうが、都市郊外住宅の場合は残念ですが、そこまでの土地の余裕がありません。だから建て替えるになります。

「三世帯住宅」についてメーカーを通じて調べてみると、事例は決して少なくはないし、各メーカーともユーザー側のさまざまな要望に対応できるノウハウを持っていきます。住宅内のバリアフリー化ははずみまで意識されています。渡辺さん夫妻にはこれが魅力なのです。

部屋の配置はもちろん、つまづいて転倒しないよう段差をなくしたり、手すりを設けたり、階段の勾配を緩くしたり、車イス（訪問客もある）を考慮して幅広廊下にしたたり、少ない動作で開閉できる引き戸を多くしたり・などが実現されています。「家族とともに成長する住まい」を提案しているメーカーもあります。

図1-2-1 65歳以上の者のいる世帯数及び構成割合（世帯構造別）と全世帯に占める65歳以上の者がいる世帯の割合



資料：昭和60年以前は厚生省「厚生行政基礎調査」、昭和61年以降は厚生労働省「国民生活基礎調査」
 (注1) 平成7年の数値は兵庫県を除いたもの、平成23年の数値は岩手県、宮城県及び福島県を除いたもの、平成24年の数値は福島県を除いたものである。
 (注2) () 内の数字は、65歳以上の者のいる世帯数に占める割合 (%)
 (注3) 四捨五入のため合計は必ずしも一致しない。

すでに建て替えて「三世代同居住宅」に住んでいるお宅を実際に訪問する機会を提供しているメーカーもあります。そこで渡辺さんは訪問会に参加してみました。

大手メーカーによる広域造成地での建て替え住居ですから外形も安定しています。樹木も育っていて、大ぶりに枝を広げたサクラも庭隅にあって、それを囲むようにしてL字型の二階家が建っています。

「ここを選んだ家内の母が子どもの成長とともに大事にしてきた樹でしてね」

渡辺さんの庭への視線を察して、ご主人がいう。夫妻のほかには高校生の娘と義母の四人家族。一階は母親の部屋と共用のスペース、二階に夫妻と娘の部屋と広いリビング。一角に書斎もあって、サザエさんのオムコさん「マスオさん」型の男性として「三世代同居」を成立させながら、マスオさんよりはずっと存在感があるように見受けられたそうです。

上下階の雰囲気の違いを感じさせなかったのは、母と娘の間に暮らし方の一貫性が保たれているからでしょう。「三世代同居型」住宅として申し分ないが、それでも義母の方の孤立遠慮がちな気配が構造やモノに表われているのが気になります。

*住宅メーカーがノウハウを蓄積

「長寿社会対応住宅」として「長寿社会対応住宅設計指針」（一九九五年、建設省。この年の一月に「高齢社会対策基本法」が成立した）が出て二〇年になります。住宅産業は、メーカー

の配慮くらべて高齢化対応がもつとも進んでいる業界です。住宅メーカーによって取り組み方は異なりますが、どこも「二世帯住宅」のノウハウを十分に蓄積しています。

そこまでは結構なのですが、せっかくの二世帯同居型住宅にもかかわらず、どのメーカーの小冊子のモデル設計を見ても、共用スペースのつくりつけが「ミドル+ジュニア」主体に寄りがちになっています。だから「三世帯型」住宅とは称しているものの、「離れた和室ひと部屋への高齢世帯の引きこもり」が推測できるものが多くみられます。ここにも高齢期が「余生」であるという旧来の高齢者意識が濃く反映されています。これではほんとうの高齢化時代の三世帯平等住宅とはいえないのです。

「人生の第三期」の主役として、これから二〇年余の長い高齢期を「円熟人生」の主役としてゆつたりと暮らす家ではない、と渡辺さんは気づいています。

暮らしの知恵を次世代に伝える

ここは妻であり子の母であり孫たちの祖母であるバアバちゃんの出番です。ア的位置が微妙なところ。ジージもそう。孫のいたずらであっても、ー（ひっぱり）の位置が下になると顔つきがけわしくなる。

孫の日々の成長につきあいながら、わが家の「暮らしの知恵」を伝えられる場としての居間（共有スペース）。そこを中心にして周りへ「三世帯」のプライベート・スペース。孫と接点を

もつ居間への動線。娘と共有する台所への動線。実質的主人であるバアバちゃんの工夫を織り込んだ「三世代住居」を実現すべく渡辺家は設計にはいつている。いまは三世代が揃っていないくとも、三世代が常に等しく扱われる同居住宅が「三世代同等同居型」住宅（長いので「三同同居住宅」と呼ぶ）です。

「家族みんなで考えていろいろ解決することができますから」

と、渡辺さん夫妻は親・子・孫三代が出くわすさまざまな場面での処理にも気をくばる。

「三同同居住宅」を実現できる渡辺家は、「超」がつくほどの「しあわせ家族」だが、国の骨格になる家族として多くあつてほしいケースであり、優遇措置を講じても地方創生を担う三世代のための居場所を増やすことだ。国の骨格を形づくる強くてたおやかな国民性は、三世代あるいは四世代同居の家族によって培われて継承されていくのですから。

「三同同居住宅」の標準化のために、国や自治体は優遇措置をおこない、建設業者はノウハウを蓄積し、企業は女性社員の地元勤務型キャリアの設置とともに、子育て期の女性が能力を十分に発揮できるよう支援する。地域と家族が総出で次世代を育てることとなります。

女性社員の六割におよぶという結婚時の「寿退社」とその後のアルバイトというM字型就業にかわって、渡辺さんの娘さんは高年齢まで真一文字型にしごとに集中できる人材として処遇されることとなります。

*「ジージ」を自慢するジュニア

そして次世代に、母系のつながりを有効に活かしながら「わが家の暮らしの知恵」を伝えることが可能になります。母と娘がやりとりする継続性のある生活感、祖父母と接することによってもたらされる孫世代へのメリットには計り知れないものがあります。父と母はともに充実してしごとに向かい、祖父母は家の内でも外でも孫たちの成長を温かく見守る。

「うちのジージがね」

とって、ジージから教わった暮らしの知恵や悪知恵を自慢するジュニアが三分の一ほどいないと、この国の先人が残してくれた「暮らしの知恵」が次世代に伝わらなくなってしまう。高齢者をたいせつにするジュニアを育てる機会をもつ家族。これもまた「高齢社会」を構築するとともに、国の骨格を強くするために重要な「三ステ化」(三世代が同等に活動できる三ステージ化)の一環といえるのではないのでしょうか。